

第29期社会教育委員の会議

第6回定例会

議事録

令和3年12月13日

【1】開催日時

令和3年12月13日（月）18時30分～20時30分

【2】開催場所

世田谷区役所第2庁舎3階 教育委員会室

【3】出席委員

坂倉委員（議長）、堀井委員（副議長）、小泉委員、奥平委員、
鍵和田委員、村上委員、権田委員、山崎委員、吉岡委員、新海委員

【4】出席職員

教育委員会事務局

内田生涯学習部長、谷澤生涯学習・地域学校連携課長、

大井社会教育係長、御園生社会教育担当係長、清野社会教育係主任

【5】傍聴人

無し

【6】次第

1 第5回議事録の承認

2 議事

（1）新たな連携・協働のしくみづくり骨子案の検討

3 その他

（1）次回の日程について

（2）その他

○議長 ただいまから第29期社会教育委員の会議、第6回の定例会を開催いたします。皆さん、お忙しいところお集まりいただきまして本当にありがとうございます。

今日は、今年最後の定例会ですが、全員で進行していきたいと思います。

本日の議事日程に沿って進めていきますが、まず本題に入る前に、前回の議事録承認についてですが、事務局より既に委員の皆様には御確認いただいていると思いますが、前回から割と時間がたっていないということで、もし加除修正、訂正などありましたら、この場でいただいて皆さんに確認いただきたいと思います。

何か追加で修正等ありますか。

○委員 すみません、4ページの真ん中辺なのですが、ちょっと勘違いして申し上げてしまい、「高校1年生と中学1年生」というところですが、昨年5年生だった、今の6年生が、去年、川場に行けなくて、今年も行けないと、両方行けなくなるということで申し上げようと思ったのが、そこを間違えて申し上げてしまいましたので、それが行けてよかったという文面にしていいただければと思います。ちょっと勘違いして申し上げてしまいました。

○議長 ありがとうございます。中1と5年生は、去年は行けなかったけれども、今年は大丈夫だったということですね。

○委員 文面としては「今の高校1年生」から、2行先の「それが今年の6年生は」までを削っていただいて、そこに「6年生は昨年、川場に行けず、今年、日光にも行けないようではあまりにもかわいそうと思っていたので、何とか修学旅行へ行けてよかったです。」という形でつなげていただければと、よろしく願いいたします。

○議長 分かりました、ありがとうございます。

ほかにありますか、大丈夫でしょうか。修正がありました。この場合、署名のほうはどうすればよろしいでしょうか。

○事務局 この会議の終了後には、山崎委員と吉岡委員に署名をお願いできれば。

○議長 はい、分かりました。では、よろしく願いいたします。

それから、今日の議事録の署名については堀井委員と小泉委員をお願いできればと思います。どうぞよろしく願いいたします。

なお、修正したものを後日、完成版を事務局よりお送りするということです。よろしく願いいたします。

今日ですが、もう第6回ということで大詰めで、これまで、前回、前々回とワークショップをして、個別にグループで意見を出してきたと。今年、今回のこの委員会は本当に、

私の個人的な感想ですが、相当濃い議論がされていて、本当にしっかりまとめていくというところにすごく重要な意味があるのではないかと考えていますが、その分、労力がこれから結構かかりそうかなと。

今日は、おおよその方向性、こんな感じでまとめていけるといいなというのが見えてくると、次回もう少し精度の高い、まとめのたたき台案を修正して最終版にしていくと、そのような流れになっています。

なので、新しい話題といいますか、結構全体的にこうしていこうという意味で言うと、今期にとっては今日がメインというか最後の意見交換の場となっていきますので、ちょっと時間を長くにとって、ここから8時過ぎということで、1時間半ぐらいですか、皆さんとしっかり議論をしていきたいと思っております。

それに向けて、事務局の皆さんと相談して、会議資料2-2、2-3、それから会議資料3という、主にこれまでのまとめをつくっています。まずこの資料について事務局から説明をいただいて、その後に、どのようにまとめていくのか、つまり、どういう仕組みづくりをしていくのか、そのためにどういうことができるのかをまとめていきたいと思っておりますので、もしここまでのところ特に問題がなければ、事務局の方に説明をお願いして議論に入りたいと思います。いかがでしょうか。

では、事務局よりお願いいたします。

○事務局 それでは説明させていただきますので、お手元の会議資料2-2、2-3、会議資料3の資料を御用意いただければと思います。

冒頭、議長からもお話がありましたとおり、今期の会議もあとわずかというところです。本日を入れてあと3回予定してございます。次回とその次は報告書の検討と確定となりますので、先ほどもお話あったように、実際の中身についての協議は、実質的に本日が最後となります。

この間、2回のグループワークを行っていただきましたが、会議資料2-1は前回の付箋図のまとめたものになりますので、後ほど御確認いただければと思います。

そして会議資料2-2ですが、A4判ホチキス留めのもので、前回のグループワークの課題等々を抽出したものでございます。

さらに2-3はA3判のもので、資料2-2を図式化したものになってございます。

2-3を御覧いただきたいのですが、A3判横のもので、これはあくまでも皆様イメージしていただけるように作成したものになってございます。

そこで本日は、この2-3の真ん中にある4つの円、これは仮に新たな連携・協働の仕組みづくりの方策とした場合に、本当にこの4つでよいのか、4つの方策となり得るのか。

また、円を取り巻く四角いものが、これまで2回のグループワークを行って出てきた課題とかキーワードというような形にさせていただきます。こちら、主な課題はどの部分に当たるのか御協議いただければと思っています。

次回行う報告書の検討が、この辺が決まってくるとできますので、限られた時間の中ではありますが、御協議いただきますようお願いいたします。

ちなみに四角い中の㊦というのは地域グループ、㊧というのは学校グループで、グループワークの中で出されたものといった意味でございます。

ただいま御説明したのですが、イメージしやすいように、資料3の報告書はあくまでもたたき台ということで、目次にある第3章の部分は課題抽出とか方策に当たりますので、本日はここが協議の核になると思っていますので、骨子案になりますので、こちらを検討していただくという形になります。

簡単ではございますが、説明は以上でございます。

○議長 ありがとうございます。まず説明について、資料の位置づけなどについての質問等々ありましたら先にお願ひできればと思いますが、いかがでしょうか。

○事務局 もう1つ補足ですが、会議資料2-3真ん中に4つの円がありまして、一応こちらが方策案と、これもたたき台ということでイメージしやすいように出しました。この4つの円に関しては、前回グループワーク2回目をしたときに全体で報告したものになります。そして真ん中にある二重線の四角「いつまでも安心して住み続けられるまち」としているのが、地域全体で共有する目標のようなものですね。こういう目標があって、こういう4つの方策をしていくとよいのではないかと、その背景には、この四角の㊧とか㊦などが課題になってくるのではないかと、会議資料3の報告書の中でも、3ページに当たりますが、第3章「地域と学校でつくる連携・協働の新たなしくみ」の具現化で、2の提言のリード文のようなところで、「ここで一番重要なことは、『いつまでも安心して住み続けられるまちづくり』という地域全体の共有目標を掲げることである。これを踏まえた上で、以下の4つの方策の柱が重要であると結論づけた。」としております。

ただし、繰り返しになりますが、あくまでもこれはイメージしやすいようにということなので、本当にこの方策は4つでいいのか、もっとあるのではないのか、あるいはもっと少なくともよいのではないのか、というところを御協議いただければと思います。

○議長 ありがとうございます。ここから意見交換ということですが、いろいろなお気づきのことがあると思います。

ちょっとだけ全体を整理すると、この報告書の構成ですが、こういう流れになるといいのかなと思っていますのは、第1章が「おやまちプロジェクト」及びその他のいろいろ、連携の事例の研究から入っています。

ということは、それは割といいやつですよ。うまくいっているとか、このようになっただけでいいんだけどねということが最初に述べられているということなので、まずそのうまくいっているケースをしっかりと分析して、こういうところがうまくいっているのではないかとこのところを押さえた上で、それに向けての課題や、実際にどうしていったらよいかというような流れで章立てが進んでいくとよいのではないかと。

つまり、このA3判は課題だけしか書いていないので、そうすると非常に課題が山積みで、どうしたらその課題が解決できるのかは、なかなかここからだと発想できないという問題があると思いますので、ちょっと皆さんの意識合わせとして、何かうまくいっている事例の、うまくいっているポイントをちゃんと整理した上で、一筋縄にはそうならないポイントと、それをどのように乗り越えるかみたいになんてちょっと分けて考えるとよいのではないかなと。

議論は順番ということではなく、いろいろ意見を言ってくださったらよいと思うのですが、最終的にはそのように整理できると、何となく読みやすくなるのではないかと思います。

振り返ってみて、まず最初は順不同にというか、お気づきの点を少しずつ御指摘いただけるとよいのではないかと思います。

コメントの時間を待つのに、雑談というか、最近すごく忙しくて、その1つの事情が、やはり小学校、中学校とのプロジェクトが結構盛んになってきていて、今週は、中学校2年生の道徳の時間に、ウェルビーイング・リテラシーゲームというカードゲームを別の研究プロジェクトで開発しているのですが、何かそれを中学の先生と話したら、それを中学生にやりたいと。もともと子ども向けに開発したもので。

最初、どうやってやろうかという話になったのですが、道徳の時間にやろうということになって、道徳の時間は、先生、誰もやりたがらなくて、「そういうものが外から来ると、みんなすごく喜ぶ」みたいなことで、2時間続きで今週やるんです。

初めて中学生向けにウェルビーイングのことを説明したり、研究プロジェクトでやって

いるので、事後に感想とかを取らなければいけなくて、学生に授業をやらせておけばよいというよりも少し手間がかかるのですが、その準備の時間が全然取れずに、わちゃわちゃしていたりと。

前にお話しした14歳のファーストプロジェクトという、中学生が地域課題を解決するというものを、実際に本屋さんでやると。提案して終わりではなくて、本当にやる。有志なのですが、実際に中学生がまちの課題に自分たちで取り組んで、自分たち以外の人に喜んでもらうみたいな実体験をしようと、計画上、本当にそうなっていると。

先週、本屋さんで、中学生が「雲の上の本屋さん」という企画を出して、どういうイメージかというと、スモークをたいて、本屋さんに入ると、下がもくもくもくと白い雲みたいになっていて、その雲の上の本屋さんなので、置いてあるものは空の本とか、天体の本とか、地球、雲の上の話題がいっぱい並んでいる本屋さんだったら面白いとか言って、店主がそれは面白いと言って感動して、それを先週やったのですね。

中学生がすごく頑張って、スモークをたいたのですが、下にスモークを常時たいておくことは難しく、いろいろ検討した結果、本をお買い上げいただいたらスモークが出るという、「何、その演出」みたいな。来たお客さんは大喜びして、「あっ、なるほど、雲の上の本屋だから雲が出るのね」とか言って、今までの最高売上げを記録するという、大人が面白がって本を買うということになった。

そして、昨日は小学生の一日店長という企画があって、小学生が買える本屋さんにするためには、小学生を店長にすればよいという中学生のアイデアで、「それ面白いね、やろう」となって、小学校の先生に言って、小学生を集めてもらって、店長が結局四、五人集まってやったんです。

そんなわけで、先週は中学校の先生が一生懸命「中学生プロデュースによる一日店長の本屋」というチラシをつくって、それを先週は中学生が集まって、通りでピラを100枚ぐらいまいてみたいなことが結構日常になっていて、小学生店長も結構大はやりで、また過去最高売上げを記録するというようなことをやったりして。

気軽にいろいろな取組ができる、それが、中学生がまちに出てきて、商店街の一室で、大学生とか大人と相談しながら、「じゃ、ちょっとピラをまいてくる」みたいなことが日常的な風景になってきていて、すごくいいなということを思いながら暮らしていて、その分すごく忙しくて大変ですが、そのような日々でした。

何かそうなるしまえばこっちのものなのだけれども、ある意味そうなるまでのいろいろ

ろなハードルというのがきつとあるのだろうなと思ひまして、改めて会議資料2-1を見たら、まさにこういうことだなど。

そもそもベースとなるいろいろな関係性があつて、絶えずいろいろな新しい人の出入りや知り合いが増えていくような動的なコミュニティーがあつて、「小学校でこれをやりますから、地域の人はこの部分に協力をお願いします」ではなくて、もう少し緩やかに、「何かこんなことをやりたいんだけど、何ができますか」みたいに相談をしてもらえ、そうすると「こんなことができるんじゃないですか」と言ったときに、学校側でもいろいろ調整してもらつて、流動的にいろいろな企画がその場でつくれるみたいな、そうすると何か地域のいろいろな人の関係性が変わつて、資源の持ち寄りのようなものが起こる。

そうすると、小学生だけでもできないし、中学生だけでもできないようなことがまちの中で起こっていくようになると、非常に、おやまちらしいというか、学校と地域の新しい形の連携につながっていくのだろうなと思つたんです。

事例研究の後にこういう分析みたいなものが挟まってくると、その分、その後は、いろいろ現実的な課題を挙げたり、それをどのように乗り越えていくかみたいな整理はできていくのではないかと思ひました。

すみません乗っけからこの資料を見て、コメントをお願いしますと言つても、なかなか大変そうなので、少し雑談をしましたが、今のような構成全体のお話でも結構ですし、実際に細かい、この4つが、どれがいいか、そんな話でも……。

○委員 今は目次というか項目だけなので、非常によくまとまつていて、グループワークで我々が言ったところは、課題にもあるし、方策にもあるので、そのグループワークの中を、うまくもう1回切り取つていただければ、うまく報告書になると思うんです。

僕はちょっとこの中で1個分からないのがあるのですが、方策の中で1、2、3は分かるのですが、方策4の従来からの関係からオープンイノベーションへというのが、意味がちょっと分からないのですが、皆さんは何を言いたいのか分かりますか。そんなことが我々のグループワークの中から何か出てきたのか。

そもそも僕はオープンイノベーションというのがちょっとぴんとこないというか、意味が分からないんです。

○議長 これは言い出しっぺが私なので、今言ったこれですね、前回のワークショップの中で、要は連携とか協力と言つているものは、そうではなくて、オープンイノベーション2.0なのではないかと。つまり、ほかの人の力を借りて何かをやるというのが1.0なのです

が、いろいろな人が力を合わせて、それぞれの学校の外だったり地域の外に新しいものをつくっていくという構造ができたときにいろいろなことが起こるのではないかということをお話ししたことを入れているのだと思うのです。

逆にこの方策は4つでよいのかという議論が、それを含めて、あるのかなど。つまり、ここで多分今日一番議論したほうがよさそうなことは、方策1、2、3、4あるいは5とまとめるのだとしても、どこがレバレッジというか、どこをまず変えたらよいのだろうかというところは結構大事だと思うのですね。

それが、今まとめているような学校の存在感、連携で必要なPTAの存在、若い世代の意識改革みたいに書いてありますが、これが本当に我々の答えかどうかは、ちょっと議論したほうがよいかもしれませんね。

学校の存在感という方策が、実際には何をすることなのかは、あまりすぐにはびんこないで、逆にこの方策をどのように提示したらよいのは、少し皆さんにも、これにとらわれることなく、いろいろ意見をいただくことがよいのではないかと思います。

○委員 学校の存在感というのは別に方策ではなくて、学校の存在感が非常によい現在、連携や協力に非常に大きく位置づけられているというような、グループワークの中でも、学校の存在は大きいのだということで、何か方策という方向の話ではなくて。

○議長 確かにね。

○委員 むしろ今までのグループワークの中でいっぱい、問題点というのですか、課題として出てきたのは、その2と3の中のPTAの存在というか、PTAの変化ですね。

PTAの変化はどこから出てきたかという、我々から見て若い世代の意識改革、ではなくて意識変化により、PTAが少し変わってきたというところが、ちょっと課題であり、そこをうまく方向づけてあげないといけないのではないかと思います。先週は、そのような話がいっぱい出てきていたなと思うんです。

○議長 なるほど。やはりこれは方策ではなくて、むしろ課題に近いと。

○委員 その課題は、どこか1の課題で述べて、その中で方策を、PTAの存在をもっと――、まあ、方向性としてそうではないかなと。

○議長 ありがとうございます、確かにそのとおりですね。

○委員 私ちょっと気になっていることが1つあって、前回の会議で委員が最後に言われた言葉がずっと気になっていて、学校も地域の中の1つだと、連携・協働という言葉を一且ちょっと外してみたらというのが非常に気になっているんですよ。

そうすると、この図式を全部、もう根本から壊すことになってしまうのだけれども、それをどう扱ってよいのかと、実はずっと考えざるを得ない。

つまり、多分言いたいことは皆さん分かると思いますが、学校と地域は連携するのではなくて、学校はもともと地域の1つなのだから、連携・協働ではなくて、本来は地域と一緒にと言うのかな、そういうコンセプトであるべきなのではないかと。

いわゆるバーサス、ちょっと言葉は悪いですが、学校と地域がバーサスになってはいけないと。これはもちろんのことですが、その中に学校は含まれているのだから、それをどう扱っていくのかということが、そこで引っかかっていることがずっとある。

そうすると、この図式を見ると、それをどう捉えて、どう図式化していけばよいのかと。もっと言うと、我々のこの会議のゴールが、ちょっとその辺が揺らいでくるなということで、自分の中でもちょっと逡巡しているところがあります。

それからもう1つ、先ほどの学校の存在自体がもう大切なんだということがありましたよね。

やはり子どもたちをいろいろな意味で、知識も含めた、育てていくということで、学校がしっかりした教育をやってもらえれば、地域は安全安心なんだと、それが一番の学校の地域に対する役割ではないかというようなお話もありましたよね。確かにそれも間違っていないと思うのですね。

ただ、それをそのように突き詰めていくと、ちょっと落とし穴がある。というと、では、学校はちゃんとやっていけばいいではないか、地域の人が入ってくるなという考え方にもつながりかねない。そのリスクは、例えば先生方が挨拶をしないとかというようなマイナスがありましたよね。まさにそれだと思うんですよ。ほんの一部ですが、地域の人に入ってきてもらいたくないとか、余計ないろいろなクレームがあるとかがマイナスに働いてくる、そういう落とし穴が出てくるということもある。

その辺をこのようにどう図式化していけばよいのかなということで、ちょっと私の中でも、まだまとまらない話です。

○議長 非常に本質的なところですね。

○委員 ですから、この前のお話は、私の中では非常によかったな、いい話がいっぱいあったなと。

○議長 本当にそうですね、できれば連携・協働が必要なのであると言ってしまうことによって、地域と学校が、対立ではないけれども、別々のものだというような認識を自然に

つくってしまうということは、多分我々の議論の中では、ちょっとそれは避けたいですね。それがそもそも違うのだということはぜひとも言いたいなと私も思います。

あともう1つは、学校がしっかり教育してくれれば本当にそれでしっかり存在意義があるのであるということは本当におっしゃるとおりで、一方で、いわゆる教室の中で行う学校教育というものが、本当に私たちが次の社会に必要な教育が、学校という専門機関の中だけで完結して提供できるのか、もう少し大きな問題を考えてみる必要はあるかと思えますね。

○委員 オープンイノベーションの考え方と全然反するあれになってしまうけれども、本来はそんなに違ってはいないと思うのです。ゴールは同じですから。

○議長 そうですね。今は、だから大学とかは、教室の中で、全然ちゃんと教育できないです。そこだけで教えようとしても学ばないし、同質的な学生だけ集めてきて、その中で競わせても、伸びる子は伸びるかもしれないけれども、全くもう無力感しかないのです。それができないから、やはり外に出て、いろいろな人の力を借りて、大学の立場からすると、教育の機会をつくるわけなのですが。

だから、学校に教育をちゃんとやってもらえれば大丈夫みたいなことが、本当にそれが今の社会で成り立ち得るのかも、一方で必要な視点なのかなと。あるだけで学校は本当に意味がありますということには大賛成なんです。

○委員 でも結果的には、学校ができなかったからなのでしょうね、学校の先生には申し訳ないですが。

○議長 どうなんですかね、その辺の書きっぷりというか、学校があることが本当に大事なので、しっかり最低限の務めをしていただければ、地域にとっては、それだけで100%ありがたいですということは、これはすごく大賛成だとは思いますが。

○委員 この会に私は保護司という立場で来ているわけですが、前は、犯罪をした人が刑務所なり少年院に入って、出てきて、それをどう再犯をさせないか、あるいは社会の中で受け入れるかということで、法務省と我々保護司でやっていたんです。

ところが、ここ最近では駄目だと。つまり、社会で受け入れ体制ができないと、必ず再犯をしてしまうという考え方が主流になってきて、つまり地域で受け入れるムードをつくっていかないと、今、再犯率4割ですので、10人のうち4人が再犯をする、あるいは刑期を終えて出てきた人は6割再犯をするという状況です。

それをなくすためには、やはり地域でどう受け入れていくかということで、今、地域が

かなりそういうものをつくっていかうではないかという1つのムードがあるのです。もちろん就職口、働き口と住居が一番の基本ですが、それぞれ、例えば世田谷区もそうですが、自治体がそういう体制をつくらなければならない、あるいはそういう1つの計画を立てなければ駄目だというような法律もできている。

だから、そういうムードの中で、何とか地域で温かく迎える。最近、保護司を中心にしたドラマがBSで3回目かな、ありますが、そんな、ちょっとあれはストーリー性があるて派手ですが、とにかくそういうムードをつくっていかうという1つの大きな流れがある。

そうすると、今の我々がやっている議論も、やはり子どもたちは地域の子どものことから、地域で全部見守っていかなければいけないのではないかという理論につながってくる。だから、多分そのように、とにかく子どもたちが別に犯罪を犯したわけではなくて、悪いことばかりしているわけではない。

でも、子どもたちは生活をして、いろいろなものを環境に、ある意味では、いいものもあるけれども、毒されている部分もある。それを地域でどう捉えて、どう育てていくか。あるいは地域の中で、みんなこぞって大人たちと育てていくかというムードはとても大事なことなのではないかというようなこととつながってくるのですよね。

だから、やはり社会全体がそのようにならざるを得ないのかな、なっていくのかなというところで、1つの話題として。

○議長　そうですね。ありがとうございます。

○委員　ですから、さっき学校がちゃんとやっていけばよいということと矛盾するのだけれども、その辺が今の社会の情勢の中で、やはり大事なことなのかなと思いますね。

○事務局　議長、よろしいでしょうか。会議資料2-2ですが、基本的には、地域グループが一番最初に来ていますが、会議資料2-1は付箋に落としていただいているのですが、グループワークでそれぞれ言ったようなことをここに落とし込んでいるということなんです。ですから、地域グループの方は、大体何となく丸のところを見ていただけると、同じように学校グループもというところですね。最後に全体での意見交換の部分ですが大きく丸が4つありましたので、そちらを少し文章化したというところですね。

ですから、先ほどの話だと、例えば会議資料2-2の1枚目、地域グループのところ丸の2つ目、「学校はコミュニティや学習活動が実現できる地域にとって大きな存在」なのだということですね。その部分も盛り込まれて、これは皆さんが前回のグループワークでお話しされたところをこういう形で盛り込んでいると捉えていただくとよいのではないかと

と思っています。

○議長 この4つの丸というのは、前回の最後の全体の意見の交換のときに出てきた大きな柱の4つということですね。なので、必ずしもそれが方策に直接つながるというわけではないけれども、大事なポイントではあるということですね。

せっかくなので、少し目を通す時間を10分ぐらい取って、その後お気づきの点、さらに議論を進めていきたいと思います。

あと1時間弱ということなので、まだ目を通していてもいらっしゃるかもしれませんが、少し議論を再開していければと思います。改めてこれまでのワークショップの議論を振り返りまして、いかがでしょうかね。どんなことでも結構です。

○副議長 今、見返していて、この報告書の構成で見ていくと、やはり今の第3章の2が一番ポイントになると思うのですね。

それで、ちょっと私、構成を考えてみたのですが、第1章はこのままで取りあえずよしとして、第2章が、これはちょっとまた違うかなと思うのです。新たな第2章は、多分第2章に学校と地域の関係論の再考のような形で、その中に協働とか連携もあるよねとか、そういうものを考える。その第2章の中身に、まず学校と地域が関わる意義とか、そして2つ目に課題というところで整理をした上で、第3章では提言という形になるのかなという感じかなと思います。

○議長 そうですね。

○副議長 それで、今現在出ている提言の(1)から(4)で、例えば(1)などは、学校の存在感の再確認と、それを向上させるための何か策があればよいわけですよ。方策2は、PTAの存在の必要性の再認識と活性化に向けた何か策があればよいわけですよ。そして3番目、ところが、その学校に対して、またはPTAに対して、若い世代が、また意識が違ってきていると。そのためには何か意識改革が必要ですよというところでの何か提案があればよいのかなと思います。

方策4は、従来の関係からオープンイノベーションへと言ってしまうと、例えば、学校の存在感を再確認しましょうとかPTAの活性化が必要ですよと言った場合には、それといわゆる従来関係の部分もあるわけですよ。

だから、従来関係を否定するようなニュアンスもあるので、そういうことではなくて、「オープンイノベーションという考え方もあるよ」というような提案の仕方のほうがよいかなという感じがしています。

○議長 この4つの柱についてはいかがですか、これで結構いい感じですか、また何か違うものがあれば。

○副議長 そうですね、何か足すものが皆さんから出てくれば。ただ、いろいろ議論してきて、すんなりはなっているかなとは思うんですよね。

○議長 なるほど。

○副議長 地域にとっては、もう学校があること自体ありがたいんだという言葉が、私もすごく印象に残っていて、ただ、学校はそれだけではよくなくて、学校も、いつでも地域の人も受け入れますよ、地域に「今学校はこうなっているのですよ」という情報提供とか、それこそやはり、開いていくことも求められるでしょうし、それが何かしら方策案としてあればよいのかという感じはします。

○議長 そうですね。第2章の在り方は本当に大賛成で、何で連携しなければいけなかったのか、そもそも連携というのは、いかなる状態を指すのかみたいなことをちゃんとそこで整理するということが結構大事かなと。

○副議長 そうですね。

○議長 あと、その学校の存在感の話の前提として、やはり「住み続けられるまち」をみんなで作っていくのだというところがあるといいのかなと。そのために、学校はあるだけでも本当によいのだが、やはりそこでも問われることは、その「住み続けられるまち」にしていくために、どういう子を育てなければいけないのか、どういう教育をしなければいけないのかは問われるべきだと思うのですね。

その地域のために何かをしなければいけないのだということを求めているわけではないけれども、では、その「住み続けられるまち」になっていくためには、どのような子を育てていくのであるかについては、学校はすごく大きな役割を示していますよね。だから、そういう意味も含めた在り方の見直しや、そのために何が書かれるとよいのではないかと思いました。

○委員 よろしいですか。まず1つ目は、この社会教育委員の会議の報告書を出したときに、今まで私も、自分がこのことをするまでは知らなかったわけです。せっかく話し合っ、「最終的にそのように結論づけた」で終わってしまうのではもったいなくて、前期のときも本当はサロンとかをやりたかったのですが、コロナになってしまっていてできなかった。あそこまでいろいろ考えたけれども、それが実現していないのが現状なので、今回は、ぜひこれを地域に下ろして、実際にこのようにやってみましょうというところが幾つかでも

出てくれることが目的なのではないかなと。

この報告書だけ配られて「ああ、そうなんだ」というのではもったいないので、私たちはそこまでできるように進めていくというか、ここに記載していけたらいいと思うのです。

それが1つと、あと、方策の「若い世代の意識改革」というこの言い方が、ここは若い世代ではないので、「若い人たちは意識改革しなければ駄目」と言っているように取られたら、全然そうではなくて、もうちょっと言葉を変えて、先ほど言っていたように、こうするにはどうしたらよいかをみんなで考えているというような持って行き方のほうが、何か「若い世代の意識改革」ってすごく違和感が、もし逆にここに20代の人が入っていたら、「えっ、何それ、意識変えなきゃいけないの」と思われたらいけないなとちょっと思いましたね。

というところで少し——もちろん内容的にはそれでよいとは思いますが、やはりみんなが受け入れやすいような、やってみようと思うようなつくり方がいいかなということが1つ。

あと、どういう子を育てたらよいかと同時に、自分たちがどのようなことをしていってよいか、もちろん先生たちも、親もそうだし、地域の人たちも、一人一人がどのように関わっていくことが大事——この社会教育というのは、別に子どもだけのことでもないし、誰かだけのことでもない、前に教えていただきましたよね、もう多世代にわたってということのを伺ったので、一人一人自分にできることはどんなことなのかがこの中に書かれていると、誰が手に取っても、「ああ、自分もこの地域のためにこういうことができるのだな」となるのかなと、ちょっと本題からはずれているかもしれないですが、そのように感じました。

○議長 ありがとうございます。「若い世代の意識改革」って、要は、まとめでは「失敗してもいいよ」という話を書いてあったので、むしろそっちのほうがメッセージ性は強いのかなと、私も確かに思いました。ほかはいかがですか。

○委員 やはりこの2年間のコロナの影響は大きいですね。だから、ここに書かれた、最後、活動報告書になる部分の方策に幾つか挙がっているところは、私は個人的には、相当ダメージは来ていると思っています。

だから、元へ戻そう、あるいは過去のよかった姿に戻そうと思っても、そんな簡単には戻らないだろうなと。それを考えながらやらないと、我々が思ったとおりににはなかなかならないのではないのかなという気はします。

例えばリモートだとか、いろいろな便利な部分があって、学校に来なくても行事が見られたり、授業が見られたり、行かなくてもできてしまうのだという部分があるので、例えば保護者の人が学校に来る機会も、もしかすると減っているのではないかと。

それでも学校の中を見ることができてしまう。だから出不精になってしまうというのですかね。出るのを控えていても、何とか学校は回っていくという部分、きっと2年間、もうコロナですので、そういう部分、いろいろな意味の影響はきっとあるだろうとは思いますが。それが1つ。

それから、学習指導要領があるので、例えば中学で言うと、そんなに簡単に教科の部分に地域の方々が入る余地はそんなにないのではないかと。

道徳や教科にはなかなか入れない。入れる余地があるとなれば、総合的な学習の時間だと思のですが、そこも教科「日本語」という世田谷の教科が入っていますから、全てではないのですが、残った時間でキャリア教育をやっていると思うのですね。

中学校からすると、中学校に保護者の方が何を求めているかだと思うのですね。義務教育最後ですから、ほぼ9割以上の方々が進路、進学先だと思うのです。その実態が、結局、塾に通わせるというところはそこだと思うのですね。

となると、教科の部分に地域の方々が入るということはなかなか厳しいですね。実態として、学習指導要領があるから、教科書を終わらなければならない。今でもきゅうきゅうとして教えているのに、なかなか厳しい。

だから、総合的な学習の時間をどのように、そして、恐らくそこはどこの学校もキャリア教育をやっているから、そこにどういう味つけをして入っていくかというところなのかなと思う。

例えばそこでは職場体験があったり、仕事について学んだり、あるいは地域に出してとか、いろいろあると思うので、そのさじ加減なのかなと思います。

話はそれてしまうかもしれないのですが、この会議資料2-3の真ん中の模式図というのでしょうか、多分これは学校、ど真ん中なのではないかと僕は思うのですね。ここに学校が入っていて、学校を土台に地域の方々に関わるというのであれば、まあ、学校なのかなと。そんな感じに思いました。

だから、どうしたらいいのかなという結論は正直、ないのですが、コロナは結構大きな痛手だったと思います。これを、この2年間をどう取り返して、どういう姿に治っていくのか、進化もあるでしょうし、ある意味退化した部分も引きずっていくのだろうとは思

います。

○議長 ありがとうございます。

○副議長 ちょっとお伺いしたいのですが、地域との連携と言った場合に、教育課程は確かにかなりきゅうきゅうとしているから難しいと思うんですが、部活動はいかがですか。顧問の先生方もいらっしゃるとは思うのですが、それ以外に部活動指導員として、地域の方に指導をお願いするとか、そういうことは現実的に考えられるのですか。

○委員 考えられるのですが、一番悩ましいのは、4時～6時というあの時間帯です。

○副議長 なるほど、時間帯。

○委員 あの時間帯に来られる方がいるかということが1つと、今非常に悩ましいのが、例えば勉強ができなかった子とか、これは残して教えてあげなければいけなかったり、再テストをしたりと、その時間と部活動はほぼかぶるわけですね。その兼ね合いですか。もうちょっと言うと、教員の勤務時間は8時15分から4時45分なんです。その中で完結できない。その時間の中で完結させるって、どうするのかというところだと思うんですね。多分、教員の勤務時間というのは、地域の方や保護者の方にはなかなか分からないと思うのです。だから6時過ぎに電話が来たりとか、そういうことはあるのですが、「いつまでもいると思っていらっしゃる」というところがあるので、8時15分から4時45分の中にどう入れるか。

本校の授業は3時20分まであります。それで帰りの学活等、清掃とかをやれば4時、例えば勤務時間の中で授業を教える、補習をさせてあげるとか、その残りの45分です。こういう実態ですよ。

○副議長 そういう意味では、せめて部活動を、国もなるべく教員の負担を減らそうという形で部活動指導員というものがあるわけですよ。そういうところで、先ほど言われたように、やはりその時間帯だけが問題だということですよ、4時から6時まで人材が確保できるかどうか。

○委員 結局、部活をやるということは、その時間帯、当然、教員は4時45分に帰れないわけですよ。6時なり6時半までやっていたら、その子たちが家へ帰るまでは、顧問は残るわけです。6時半までやれば、恐らく7時までいるでしょう。6時までやれば6時半まではいるであろうと。そうすると、教材研究はいつやるのかと。

○副議長 やはり部活動というものは学校教育から切り離せないものですかね、どうですか。ちょっと興味関心というか、感想的になってしまうのですが。

○委員 いや、難しいと思いますね。地域で受けてくださるのだったらベストだとは思いますが。恐らく文科省もそうしたいと思っているのだろうし、例えばサッカーなども、Jリーグとか、いろいろな組織ができて、クラブチームなりが育っていったのは、そういう経緯があると思うのですが、実態として、なかなか改善できないのはこの部分ですよ。

○議長 ちょっと私、どう考えてよいのかが分からなくて、ちょっと余談ですが、ウェルビーイングの考え方は、我々のやっているゲームの根本になっている4つの概念が、結果的に道德の大きな4つの項目と全くかぶっていて、つまり「これは道德教育でいいじゃん」みたいな、全部これでチェックできるみたいな話もしていたのですが……。

結構フレキシブルにやってくださって、もちろん紙に書いて、これは何のためにやっていて、文科省のウェルビーイングという定義がこうだから、こうやっていますみたいなことをやってもらってなのですが、割と柔軟にやってもらっていて、それがちょっと延びそうだとしたら、「昼休みに掃除してしまっておいて、学活も終わらせておくから、10分、20分延びても大丈夫です」みたいな、「では、全員集めて体育館でやりましょう」みたいな感じなんです。

逆に「何かそのようにならない」、あるいは「なる」ということが、どこがポイントになってくるのかということが、多分すごく大事なところだと思うんですよ。

一般的に言うと難しいのかもしれないのですが、逆にそうでないところからすると、あまり難しさの根源が分からないというところもありまして、その辺はちょっと皆さん、御意見はいかがでしょう。これは方策をどう書くかというところのすごく大事な論点かなと思うんですよ。

正直ちょっと私は、それをどのように理解して提案すればよいのかが分からなくて、皆さんのお知恵をいただければと思うのです。

○委員 やや問題が大きくなってきてしまって、学校そのものの問題を取り上げてしまうと、ちょっとこの地域との連携とまた別問題の話になってきてしまう。今までこのグループワークでも、そこにあまり触れていなかったですよ。触れてよいのか、いけないのか、そこからだと思うのですけれども。

そこに立ち戻ってしまうと、ちょっと全て大前提、まあ、コロナもそうですが、コロナの前提は、今までちょっとグループワークでもあまり、そんなに、コロナ以前のことを前提にやっていたので、コロナのことを考えてしまうと、また全然話が振出しに戻ってしまうかなと思います。

○委員 それはウィズコロナ、アフターコロナでしょうね。それしかないですものね。

今日はようやく1桁になったけれども、今出てきているのは、そういう阻害要因ですよ。阻害要因というものは、もう話の中で結構みんな出てきて、それをどう克服するかということで我々は議論をしてきているから、そこまで戻ってしまうと、またちょっと議論が停滞してしまうかなという心配はありますね。

やはり細かいところで、文言とかを直す必要はあるかと思いますが、基本的に流れとしては、これでよいかと思うんです。具体例があって、それから我々が今までどのような議論をしてきたかがあって、それから、では考え方はどうするか、それに基づいて方策をどうするかというこの流れはこれでいいかなと思っているんです。

ただ、私の思いつくところでは、例えば学校の2の提言、方策の4つをどうするかが、これからかなり議論になってくると思うのです。

例えば方策1、学校の存在感は何かというと、例えば教育課程をちゃんとやってくれと。それからもう1つは、施設、災害とか地域のスポーツとか、いろいろなクラブの施設を開放してくれとか言う。

それから方策2の場合には、PTAは地域の一人なのだから、地域と学校とのジョインターである、その役目をしてくれとかですね。

あるいは若い世代の意識改革、これは文言は云々ですが、例えば今まで考えていなかった高校生を使えばよいではないかと、大学生もいるではないかと。それこそ先生のようなですね。今まであまりこういう考え方はないですよ。

それから方策4の場合には、ではオープンイノベーションとは何か。今出た部活への支援だってオープンイノベーションなんですよね。それからウェルビーイングももちろんそうだし、事業にどう応えていくかと。

私の頭の中で考えるのはそれぐらいですが、ただ、このように我々は報告をしていって、では、その後どうするかは、さっきの話につながるのですが、この会議の目標はそこまで、一応報告書を出したということまでで役割は終わるんですよ。

でも、本当にそれでよいのかという疑問がととも残るんですよ。例えばこの後、連携とか協働という言葉を避ければ、地域の中で子どもを育てるプロジェクトチームをつくって、例えば8つの地域に1つずつ拠点校をつくって、そういうものを進めていくという具体的な方向に行くのか。あるいは学び舎でもいいですが、あるいは中学校の場合には4つの拠点校をつくって、チームをつくって、それをプラン・ドゥー・チェック・アクションでや

っていくのかという、そののところまで本当はやらないと意味がないのかなという気がする。

ただ、我々この社会教育委員の会議では、そこまでを要求されていなければ、もうそれはそれでいいかなと思うのですが、ただ、そういうことを見通していかないと、なかなか方向性が、何のためにやっているのだというような、ちょっとむなしい感じがしないでもない。

○議長　そうですね。

○委員　すみません、もう1ついいですか。今、学校の現状をおっしゃったことは本当にそのとおりなので、そこは中学生の保護者が求めるものというところでおっしゃったと思うのですが、地域の人が中学生に期待するところは、前回のときに話したように、災害時に、高校生は違うところに行っているんで、地元にいる中学生が、そういうときに避難所の設営なども含め、手を貸してほしいなという力になるのが中学生ですよ。

あとは学校の施設のこと今、おっしゃってくださった。それで十分ではないかなと。それ以上のことは多分求めてはいないと思うのです。

それで、やはりもしここに「いつまでも安心して住み続けられるまち」というのを掲げるとしたら、そのためにどのようにしていきましょうか的なことの話を進めていくのがよいのではないかなと。

なので、高校生や大学生を全然取り入れていなかったなというところで、住み続けるこのまちなのだから、当然住んでいる自分ちの子も大学生だったりするわけですから、そういう人も含めて、この目標、「いつまでも安心して住み続けられるまち」というのが私たちの目指すところであるならば、ちょっとそこに向かっての、若い世代の意識改革と言うよりは、若い世代ができること、期待することとか、そういうところにしていったら、方策も何かまた見えてくるのかなと思いました。

その先がどうなるかはちょっと分からないですが、これを手にしたときに、「ああ、こういうことを社会教育委員の会議では話し合われているのだな、では、実際やってみましょう」というところが自発的に出てくれたら一番うれしいなとは思っています。

○委員　それが狙いなんでしょうけれども、ちょっと具体的に動くかどうかはね。

○委員　そう、やらなければいけないということではないけれども、せっかくこうやって2年間かけて話し合って、みんなで知恵を出し合っているんで、それがどこかでまた実現したら、それを生かしてやっているところがありますよ的なことが、どこかの世田谷区内

の幾つかであるといいなと思います。

○議長　そうですね。実は教育長とか、「おやまちプロジェクト」のようなことをうちの学校でもやりたいみたいな幾つかの地域の人から相談があって、それについて勉強会をやるかみたいなこともあるんですね。なので、これはちょっと私個人のゴール観の問題ですが、少なくともそういう人に見せたときに、なるほどと思ってもらいたいというのですかね。それで一般論がまとまって行って、難しさだけ書いてあって、どうすればいいか、ヒントにならないねと言われてしまうと、ちょっとつらいというか寂しい。なので、ああ、なるほど、そうかとちょっとでも思ってもらえるようなものには最低限したいと。

その先のゴールとしては、一緒にチャレンジができるような——全部に広めることは難しいですが、何か手を挙げてくれた人と一緒に、ちょっと相談しながら、「どうやっていこうか」みたいなことが、この報告の延長で生まれるといいなとも思いますね。

○委員　ちょっと前に戻ってしまうのですが、方策3の「若い世代の意識改革」というのは、やはり言葉としてはいかなのかなとは思いました。

これを見た瞬間に、若い世代は引いてしまうのだろうなという、若い人たちが一番嫌う感じのものだと思うので、というよりは、若い世代が意識改革して何かやっていこうというよりも、別に若い世代でなくても、例えば自分と同世代だって、すごく地域のこととかに後ろ向きな人とかは山ほどいるわけだから、年代で切って変えていこうというよりも、今あるがままなんだけれども、「誰もが気兼ねなく前向きに参加できるような仕組づくり」みたいな表現のほうが前向きでいいのかなということが、この方策3のところの言葉の中で思ったことです。

その次が、「いつまでも安心して住み続けられるまち」ってどんなまちだろうなと考えて、それから、「おやまちプロジェクト」のこととかをイメージしたときに、では、どんなものを「こういうものがあるといいよね」という「こういうもの」というゴールイメージをどう持てばいいのかなとちょっと考えていたのですが、地域、まちというところの中にはいろいろな人がいて、例えば学校があれば子どもがいて、私たち教員がいて、近くに住んでいらっしゃる方がいて、商店主がいて、大学があれば学生さんがいてといういろいろな立場、状況の人がいるのだけれども、このまちの中にいるいろいろな立場や、状況の人が、みんな、「自分がこのまちの中で何かやることによって、自分なりの自己実現が図れるぞ」というようなものがあると、「安心して住み続けられるまち」、「このまちいいなあ」という、「あっ、ここで自分はこれをやっているから、何か生きがいみたいなものを感じるな」

というようなまちなのかなと思いました。

例えばそれを小学生とかというと、「あっ、僕この学校好きだよ」とか、「毎日学校へ行っていると楽しいよ」というような思いになれるような学校づくりを、やはり私たちはしていかなければいけないのかなとは思いました。

決してもうそこで、学校という箱の中と、教員という集団でそれが完結するなどということは絶対にあり得ないので、その中に必然的に地域の方とのつながりとかいうものは必要になってくるというふうに思っています。

○議長 ありがとうございます。

○委員 前回、挨拶というキーワードが出たと思うのですが、小学生が近所のおじさんや、おじいさん、おばあさんに、おはようございますとか、こんにちはという、その挨拶1つで、もう十分役割を果たしているかなと。そのまちな人とコミュニケーションが取れているということで、もうそれでいいのではないかなと私は思います。だから、誰でもできることがきっとあるので、そんなところも少し提言の中に入れられたらいいかなと思います。

○事務局 これは私が申し上げることではないのですが、この活動報告書のたたき台を何か皆さんにイメージしやすいようにと作成して、皆さんの気持ちになると考えたときに、第3章、さっきも言ったように、この活動報告書の3ページにも記載したのですが、これがよいのかどうかは、また皆さんに考えていただきたいのですが、第3章の2の提言のところです。「『おやまちプロジェクト』の取り組みは特殊な例ではなく」と。

一見特殊のように見えてしまうのです。だけど、第2回目に視察に行って、高野さんからのお話、課題から入らないよ、とにかくやりたいということを大事にして、とにかくやってみるんだ、だから、それが長続きしているんだというお話があったんですね。

たまたま小中学校があって、商店街もあって、大学もあってというようなことで、何となく特殊というか、「あそこだからできるのだ」と思われがちなのですが、そのように言ってしまうと、「うちは無理だよ」となってしまうので、あくまでも特殊な例ではなく、どこの地域でも、そこにある資源を有効に組み合わせることで連携・協働は可能になってくるのではないかと、では、それな何かということだと思っております。

それはいざ有事のときに中学生の力は必要になるのだけど、では、それを活用するために日頃から地域とどんな関係性を結んでいったらよいのだろうかということが大事になってくるのではないかと、今伺いして感じました。

ですから、どこにでもある、どの地域でも、そこにある資源、学校も含めた地域、その

資源をどのように有効に組み合わせると、連携・協働という言葉がよいのかどうかは別ですが、一緒に何かやるときに、どのように、そして、それが61校の小学校と29校の中学校がありますが、うちの学校とか、うちの地域は、こんなところがちょっとヒントになるとか、そんなふうになっていくとよいのか、どの学校もおやまちみたいなレベルではなくて、うちはこのレベルでいいよね、ここはヒントになるよねというような形をどう盛り込むかが、何か大事なような気がしてきたのですが、いかがでしょうか。

○議長 なるほど、そうですね。前提として「いつまでも安心して住み続けられるまち」という、その地域の人々にとってのゴールのようなものが何か共有されていて、この4つの柱は、悪くないなと何か思い始めてきて、その中で、地域はいろいろだし、その地域なりにやっていくということが必要で、いろいろな立場の人たちがそれぞれに活躍しているという状態の中で学校の役割、存在感というものが、これまでどおりの学校とか、学校と地域の関係ではないという、まず最初の意識の前提として、そこが変わっていくということが大事なんだよという意味で、何か1つ目の前提がそのように見えてくるかなと。

そのときに、おやまちみたいなものはどこでも起こり得るし、でも、起こり方は全然違うし、でも、それはそんなに大げさなことではなくて、何か教科教育は教科教育でちゃんとあってよいけれども、そうではない、そこをいろいろ入っていけるところについては、いろいろもっと可能性があるというところが、大学、学校の地域の中での位置づけの、ちょっと変化なのではないかということが1個目と。

そして、そのためにつながりは大事なので、PTAに限らず、PTAは宝庫なのだけでも、やはり地域のいろいろな資源にどうアクセスするかみたいなことが、2本目の柱としてあると。

そして3つ目は、その意識改革というのは、多分「気軽にやっていいよ」とか「好きなこととか得意なことを大事にしましょう」みたいな。学校教育は結構「ねばならぬ」とか「こういうのをやってもらわなければいけない」みたいな義務とかが立つのだけれども、やはり実際に意識改革で語られたことは、失敗を恐れないとか、おやまちでは「課題から入らない」とか「好きなことを大事にしよう」みたいな、そのための方策だと、もう少し見えてくるだろうと。

イノベーションのほうは、実際のやり方ですよ。決められたことをお願いしてやるというよりも、「相談しながらつくっていけばいいではないですか」みたいな、そういうことだと、本体の在り方は問わなくて、もう少しほかの違う人と接するときのマインドセット

とスキルセットのようなものを変えていくことで、何か十分変わっていくみたいなの、そういう見え方になるということもできるのではないかとちょっと思って、お2人のお話を聞いていました。

○事務局 どうしても連携・協働と言うと、やはり学校の先生、児童生徒、それから地域のおじさん、おばさん、この3者は絶対いなければ駄目だとか、そこに保護者がどう入るかとなってしまうと、どうしても、対等で、こういう関係性でとなってしまうかもしれないので、そうではなくて、もしかすると放課後、それこそ中学校の生徒と高齢者の方との組合せだったらどうなのだろうかとか、何かそのように考えていくと広がっていくのかな、何か登場人物を絶対にこれと、これと、これと組み合わせてしまうと、もうなかなか難しいかなというところもあると思うので、何か変な固定観念みたいなものから解かれると、また少しイメージが出てくるかなという気はしました。

○委員 最初にお話を聞きながら自分で絵を描いたのですが、さっき委員がおっしゃったとおり、地域があって、そのど真ん中に学校があってというのを描いて、この後どう描いていけばよいのだろうと考えて、どこの地域にも必ずある当たり前のこと、地域の中に学校があって、そこに地域の人である保護者がいて、学校の中にはその子どもたちを教える先生がいてと最低限のことだけを考えていく。

さっき「おやまちプロジェクト」の話をも成功例として出してしまうと、どうしても「ああ、うちには無理だ」と、私も自分の地域を考えると、そのように思いました。ただ、逆に私が住んでいる地域は、下北沢という若者がたくさん集まる地域があるので、あそこは、いかにして変えていくか、新しいまちにするかということを考えていくところなので、本当に地域によって持っているものが違いますし、目指しているところも違うと思うので、本当に最小限の地域にあるものから考えていくのがよいのではないかなと思います。

もう1つは、下北沢は新しいまちで、小学校も新しくできたので、やはり外から入ってくる方がたくさんいらっしゃるのですが、皆さん下北沢に永住しようと思って来ているわけでは決してなさそうなんです。

家を買ってというには、ちょっとやはり土地や家が高いからもあるのですが、「いつまでも安心して住み続けられるまち」を目指している方と、そうでない方の中にはいらっしゃるというところもあることは忘れてはいけないところではないかと思っています。住んでいるところが居心地がよいということはとても大事なことだと思うのですが……。

○委員 それで言うならば、知っている方は、私立の小学校、中学校に行くために子ども

が遠いので、その近くの地域に引っ越す。でも、引っ越してみたところ、私立が合わなくて、では、そこの公立に替わらなければいけないとかいったときのことまでも考えてというようなことで、住まわれる場所を買われるという方もいるので、やはり子どもさんがいる方に対しては、やはり学校、子どもの進学先をすごく考えて、もちろん御自身の経済状況もあるのですが、そういうことを考えて、住む場所を考える第1の条件は学校ということとはすごく、よい教育をしてくれるということもそうですし、あと医療費がかからないとか、そういうことも含めての、子育てを中心に住まいを考えるということがある。

また、ここに書かれているのですが、自分も含めて幸せになるためにとか、地域の人たちがそれぞれどういう役割を果たしていったらよいか、地域で自分がどういう役割を果たしていったらよいか、そういうことを考えている人は意外と少ない。自分の幸せとか、何か自分の今がいっぱいいっぱいということが多いので、そういうことを考えてもらえる環境をつくるということがすごく大事ななと。

自分が幸せを感じられるのは、やはり周りがあってこそで、人を淘汰して幸せって、そういうことではないのだよということが感じられる、そういう経験ができる、そういう地域というものが大事ななと。

そういうことが循環して行って、その循環が持続、住み続けたいという結果としてなるのであって、これが目的ではないと。結果として住み続けたいまちになっていた、やはり居場所があって、そこに人としての教育がなされる、やはり幸せ感人はそれぞれあると思うのですが、小さなことを幸せと思うかもしれないし、それこそ月や宇宙に行くことを楽しみに思う方もいるかもしれないけれども、多様性が認められる地域、まちがつくられていったらいいなということを思っています。

その中で、学校も、うちの地域は、英検とか漢検のお手伝いをとか、学校に入ったりというように、やってくれたら、そういう会場を提供しますよということで、お手伝いに入ったりということもあるので、やはり困り事とか、やってくれたらいいなということですか。

あと、地域住民からすると、不登校になってしまったときに、なかなか子どもがそこに動かないというときに、では、ちょっと身近なところで一呼吸置ける居場所があったらいいなとか、高校を卒業するのだけれども、大学進学は行きたくないけれども、なぜ行きたくないかという、人との関係に傷ついているからだ。では、ちょっと何か人との関わりを持てる場所があったらいいなみたいな、ほんのちょっとした一歩をサポートしてほしい

なという声が結構ある。

ですので、そんな、おやまちのように大きなプロジェクトではなくても、小さな声が拾える環境もあつたらいいなということがあります。

○委員 やはり今のお話を伺っていて、最終的にどういう形でこの報告書、提言がまとまっていくかはまだ見えないのですが、できたものに関しては、やはり手に取って見ていただくとか関心を持っていただくというところがすごく重要ななという気がしました。

そのときに、例えばこの方策の1、2、3、4というものの方向性としてはよいとは思いますが、ちょっとキャッチーな書き方を、例えば、方策3だったら「やりたいことをやってみよう」とか、4だったら「相談しながら進めよう」とか、もちろん固い言葉が入っていたとしてもよいのですが、サブタイトルのような形でそんなものが入っていたりすると、少しいろいろな方が受け入れやすくなるのかなという気はしたのですが、それはお役所的に……。

○事務局 全く問題ないと思います。

○委員 ちょっと今の話は、今議論をしている話の本筋とは違うのですが、そんな工夫のようなものも多少あってもよいのかなと思いました。

○事務局 当然この報告書は、渡部教育長はじめ教育委員会にも見ていただきますし、それだけではなく、庁内の関係部署などにも配布します。それから、例えば青少年委員会とか、あるいは学校運営委員会、当然、小中学校とか、そういう関わりのあるところには配布しようと思っておりますので、教育委員会だけがということではなくて、やはり実際に、特に地域の方とか学校の方が、関係者が「なるほど、これはいいね、うちもやってみたいな」となるようなものが一番ベストかなとは思っています。

○議長 そうですね。

○委員 そうしたら、3ページにある1の課題抽出・整理の(4)学校の多忙化は抜かないと駄目だと思います。

○委員 分かりやすいというか、読んでみたいと思うような感じのまとめ方は、とても必要なことだなと思いました。

それから、結局大上段にというか、一番安心して住み続けられるまち、住み続けたいまちと考えたら、やはりそのまちが好きと。そのまちが好き、住み続けたいということはどういうことなのかなというところが大事なところなので、それには例えば面白いまち、楽しいまちとか、みんなが割と幸せとか、何か活気がある、住みやすい、安全安心、いろい

ろな要素があると思うのですね。

それで、結局は子どもたちも育って、やがてまちの一員になって、その社会、まちをつくっていくわけですので、そこでまたその子どもたちが大人になって、やがて、やはり同じように思って、持続性あるものであるという必要があると。

そうすると、物すごく難しいことではなくて、ごく自分たちのまちで、本当にあるもの、できることで、誰もが可能な方策という形にまとめられたら本当によいのかなと思います。

そういう意味では、やはり学校と地域とかいうことでは完全にないなとも思いますので、何かそこをうまく皆さんに分かっていただけるまとめ方ができたらいいなと思います。

○委員 いつまでも住むわけではないというところでは、この「安心して住み続けられるまちづくり」というお題だけだったら、もうすぐにでも取りかかれる。「いつまでも」というのがつくと、すごく大変だなと。

もし自分が、今、学校運営委員なので、「こういうものが出来上がりました」と皆さんに紹介して、「うちの学校でもぜひ」と言ったときに、「いつまでも」がつくと、すごくずっと先のことまで考えなければいけないなと思うけれども、今現在、私たちが安心して住み続けられるまちづくりをするにはどうしたらよいかというだけだったら、もうちょっとやりやすいのかなということが、今ちょっと思ったことが1つですね。

それと、この(2)の「連携に必要なPTAの存在」と、もしこれがそのまま文字になったとしたら、はっきり言って、もうPTAはどん引きですよ。

○議長 なるほど。

○委員 ちょっと言い方は変ですが、小学校の保護者にとっては、「私たちは子どもたちのために何かやってあげたくてPTAを引き受けているのよ、なのに、この地域のために、まちのために連携までしなくてはいけないの？」となってしまうと、余計「PTA、ちょっともう恐れ多くて、私はいいです」となる人が多くなってしまっているので、結果としては、そうなんです、人材の宝庫だし、私たちみたいに、そこからの人がこうやって居残っているわけなので、それは事実だけれども、表現の仕方をもう少し変えたほうがいいかなと。何がいいということは、ちょっと今浮かばないですが。

最後に、やはりうちも小学校の学区域の中に商店街がありません。なので、やはり「おやまちプロジェクト」が成功例となると、「うちにはできないよね」となってしまうので、そういうそれぞれの世田谷61校ある地域、全部違うので、それぞれに応じて「こんなことができるのではないの」ということが提言でできたらいいなと思います。以上です。

○議長 確かにそうですね、ありがとうございます。

最初におっしゃっていただいた「いつまでも安心して住み続けられるまち」というのは、これでよいと思うのですが、多分二重に意味があって、「私がいつまでも」という意味と、「そのまちがずっと人が暮らせる」という両方の、多分SDGs的には後者の意味合いが強いわけですよね。

そうすると下北沢も、その人はあるところで流動性が高いというか、引っ越してしまうかもしれないのだけれども、そういう人がずっと来てくれる、それによってまちが継続するとか、あるいはそこでの、下北沢での子どもたちに対する教育があるからこそ、その子どもたちが別のまちで大人になったときに、そのまちがずっと続いていくみたいな、何か大きく言うとそういう話なのだろうと思って、その子が育って行って、またそのまちをつくっていくということが、一番長い意味での持続可能なまちづくりだと思うのですね。

そうすると、それは、本質的な意味でのキャリア教育ですよね。自分たちの自己効力感、自分から社会を変えていけるのだという、その実感を小中学生のときにちゃんと実感できるということがいかに大事であるか、そして自分の人生は自分で切り開けるという自信を持つということがキャリア教育だとすると、やはり学校の教室の中で完結することはちょっと難しいと。

そして、「地域のいろいろな人が自分なりにその地域に関わって活躍できている状態が、その持続可能なまちのすごく前提なのである」みたいなことがうたわれて、それはキャリア教育であり、地域との関わりでありということが示されると、「それに向けて何ができますか」のような流れになって、まず、そのように見てみましょうと。

だから、キャリア教育というものはそのためにあるし、地域の関係もそのためにありますというところが入り口で、この4本柱をそのまま生かすと、そのためにつながりが必要だから、PTA以外にも地域のいろいろな資源、商店街があればよい、大学があればよいのではなくて、地域にある資源がちゃんとつながるということがすごく大事だから、そのために何ができますかというようなことや、そのために、何か「ねばならない」みたいではなくて、気軽にやってみるとか、楽しいこと、好きなことを生かすみたいなことが、実はそれに向けての具体的なアクションとして大事なものであるというようなこと。

そして、やり方を決めてやらせるのではなくて、何かいろいろな人と相談しながら柔軟にやっていったほうがゴールに近づくみたいな、そういう4つ目の柱の話がある。

そうすると、骨太なのだけれども、やることは割と手軽というか、身近にアクションで

きそうなことが、しっかり事例を持って示されるとすると、それはそれですごくよい導きになるのではないかということが、イメージが少し何となく湧いて、そのときに、やはり分かりやすい言葉がいいですね。

○委員 今のSDGs的な意味合いでの「いつまでも住み続けられる」ということはとてもよく分かりました。ただ、一方で私、どちらかというところ「いつまでも」というよりも「住み続けられる」に引っかかってしまったところがあって、例えば自分がと思ったときに、僕が今住んでいるところと、その地域と学校は違う場所ですね。僕は今そこに住んでいないし、例えば大学の学生さんもそこに住んでいない。

そして、今までずっと検討してきて、議論してきたことは何かというと、居住するということを基本には特にはしていなかったような気がして、それよりも「誰もがちょっとずつ活躍できるまち」みたいなイメージなのかなと僕は勝手に思っていたので、みんなが少しずつやりたいなと思うことをやることによって、その人たちがちょっとずつ活躍できて、そのちょっとしたこの人の活躍が、他の人にとってすごくありがたいことであってというものがいっぱい、いっぱいあるようなのいいんじゃない？というような話だったように感じ取っていたので。

○議長 ちょっとうまくその辺のね。

○委員 何かの言葉にしようと思うと難しいなと思うんですが……。

○議長 立論の部分なので、ストーリーをしっかりと……。

○委員 ただ、まちはやはり住んでいる人が基本だということで言えば、もうこれで全然、何か文句があるとかいうわけではないのですが……。

○議長 そうですね。逆に住んでいる人だけでやろうとしても、多分持続可能にはならないので、働きに来る人とか学びに来る人とかも含めた、だけど、それが単にこれまでの財産を食い潰していくのではなく、誰かが疲弊していくのではなく、次の世代も同じような、よりよいものがつながっていくためにどうあるべきかということだと思っておりますね。

そのためには、お互いが、いろいろな人が力を発揮して、関わり合っていくということがきっと大事なことであって、そのために学校は何ができるか、一人一人とどう関わるのか、そういう流れに持っていけると、読みやすいし、役に立ちそうだなという印象を受けました。でも、その辺はちょっとしっかり構築していかないといけないかなと思います。

すみません、最後に何か御発言がある方はぜひいただいて、もしなければ、一旦今日は区切りたいと思いますが、いかがでしょうか。

○委員 1つだけいいですか。自分の地域なので、「住み続ける」には違和感なかったのですが、今おっしゃられることを「なるほどな」と思いまして、でしたら、例えば「安心して居続けられる」とか、そういう形にすれば、仕事でいても、住んでいても、全てオーケーなのかなと思ったりしました。

○副議長 私も単純に「安心できるまち」でと思いました。

○委員 ああ、そうですね、「安心して居られるまち」とか「安心してここにいたいなと思うまち」というか、それだったらいいと。

○委員 今のお言葉、とてもよかったですと思います。最初に委員がおっしゃったのですが、保護司のお話ですよ。刑務所だとか少年院から出てきた人が居られる場所、そういう人たちは、多分、何かあって「活躍していこう」ではなくて、地域にもしかしたら迷惑をかけてしまうかもしれない存在かもしれないので、その迷惑を受け入れてあげられる地域という意味で、さっきおっしゃった「居続けられる」、「いたいと思えるまち」という形はすごくよいと思います。

私、実は今、仕事で不登校の中学生を受け入れているフリースクールに勤めているのですが、その中学生の方は学校に居場所がない、でも、やはりどこかに居場所が欲しいと言って私たちの施設に来られたりするのですが、迷惑をかけてはいけないと思っていると、やはりすごく心に負担がかかるので、「迷惑はかけていいのだよ」と周りのほうから働きかけられると、自分の居場所はここにあるんだと思えるというような考え方があると聞いたので、さっきのお話とちよつかぶるところがあるなと思いました。

決して「誰もが活躍できるまち」だけではなくて、「迷惑をかけてもいいのだよ」という、受け入れられる地域であると、温かくて居続けたいと思えるのではないかなと思いました。

○副議長 安心できるまちは、やはり顔見知りがいるとか、自分を認めてくれる人がいるまちではないかと思うのです。失敗もチャレンジもそうですが、やはりずっとこれまで議論してきた、挨拶は必要だねというのは、多分そういうことなんですよ。挨拶の言葉をお互いにできるということは、本当にそれだけでも、「あっ、知っている人がこのまちにはいるのだ」というだけでも安心できると思うんですよ。

だから、連携・協働という言葉がふさわしいかどうか分からないですが、学校と地域がつながっているというのは、その環を広げるといふか、安心の環を広げるといふか、そういう意味合いが多分あるのじゃないかな。

そういう意味では学校の存在感は、いざというときには自分が避難してくる場所であり、

そこに知っている人がいれば心強いし、安心できるし、そして今度PTAはPTAで、子どもたちの笑顔のためにあるけれども、そこでも顔を広げれば、子どもにも、そして大人にも安心が広がるしという形の、安心の環を広げるために、やはりそういう関わりがあるのかなという感じは、聞いていて思いました。

○議長 ありがとうございます。まあ「暮らし続ける」とかぐらいのほうがいいのかもしれないですね、住んでいる、住居があるというだけでなく、いろいろな形でその場所、その地域で活動できるということに広げたほうがよいと思いますね。

○副議長 でも、先ほど委員が言ったような表現が一番、安心していただける、ありのままに居られるとか……。

○議長 そうですね、活躍だけではなくて、受け入れてもらえるということも含めて、いろいろな関係性があると。ありがとうございます。

では、すみません、少し時間を超過してしまいましたが、会議としてはここまでとしたいと思います。引き続きどうぞよろしくお願いします。

最後に次回の日程を決めて終わりたいと思うのですが、次回は1月でよいでしょうか。何か事務局のほうで候補日などがありましたらお知らせください。

○事務局 大変タイトではあるのですが、この第29期、1期2年が5月31日までという形になります。ただ、そうしますと来年度に差しかかってしまうということもあると、例えば小学校、中学校の校長先生たちは異動ということもあると、その時点で、4月以降は人が代わってしまうおそれもあると、できれば年度内に終了したほうがいいのかなと思っています。

ただ、3月というと、それこそ学校現場では卒業式だったり異動ということも出てくると、2月ぐらいにと。ですから、タイトなスケジュールですが、1月、2月、7回、8回ができるといいのかなとは思っております。

○議長 まとめるところが多分一番タイトかなと思うのですが、2月までにあと2回やるということですね。

○事務局 そうです。

(日程調整)

○議長 では、1月24日、26日どちらかということで、ちょっと皆さんには恐縮ですが、仮押さえで、入るかもということで御予定いただければと思います。

では、事務局の皆さん、会場のほうを御手配お願いいたします。

最後にその他ですが、何か皆様からありますでしょうか。

○事務局 事務局からは、お手元に参考資料ということで、ピースセミナーのチラシと、わくわくウィンタープランという、特に冬休みから3月ぐらいまでの期間、子どもたち、あるいは親子も含めていろいろなイベント等々の催物を掲載しているものがございます。御参考までに配布させていただきました。以上でございます。

○議長 ありがとうございます。

ほか、いかがですか、何か連絡事項でも結構です。ないようでしたら、本日の会議は以上で終了としたいと思います。

では、本当に今日もありがとうございました。